

研究報告

女子学生がもつ赤ちゃんイメージの特徴 —看護学生と他学科学生の比較から—

中 越 利 佳¹⁾, 山 口 雅 子²⁾

¹⁾愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科, ²⁾札幌医科大学保健医療学部看護学科

要 旨 本研究は、看護学生と他学科学生の比較から、女子学生が描く赤ちゃんイメージの構造とそれらに関連する要因を明らかにすることを目的に、A県内にある大学・短期大学・看護専門学校に在学する20歳以下の1年生に対して質問紙調査を行った。調査項目は、個人的属性、乳児との接触経験、赤ちゃんイメージ、思いやり尺度、児に対する関わり意識尺度、赤ちゃんの範囲である。有効回答300名（有効回答率65.2%）を分析対象とした。

赤ちゃんイメージは、第1因子「情緒性」、第2因子「好感度」、第3因子「意思性」の3因子構造であった。児に対する関わり意識は、「育児肯定」「育児行動不満」「乳幼児志向」の3因子構造であった。「好感度」は、「情緒性」・「育児肯定」・「育児行動不満（逆転因子、得点が高いほど不満は低い）」・「乳幼児志向」と正の相関を示した。

看護学生は他学科学生と比べ、「思いやり得点」と「乳幼児志向」・「育児行動不満（逆転因子、得点が高いほど不満は低い）」が有意に高かった。加えて思いやり得点が高い学生ほど「情緒性」と「好感度」が有意に高かった。

また、児と複数回以上の接触経験を持つ学生は、「好感度」と「育児肯定」・「乳幼児志向」が有意に高かった。他学科生は、赤ちゃんとしてとらえる範囲を月齢の大きい児までを含めてイメージし、大きい児をイメージした者ほど「好感度」が有意に高かった。また、児と複数回以上の接触経験を持つ学生は接触経験がない学生に比べ、有意に「育児行動不満（逆転因子、得点が高いほど不満は低い）」の得点が高かった。

児との接触経験が育児行動への不満を弱めること、また思いやりが強い者ほど、接触経験を重ねることで、赤ちゃんイメージと乳幼児への関心を肯定的に高め、育児を肯定的にとらえることが明らかになった。親役割準備教育として、思春期までに思いやりをはぐくむ教育と継続的な児のふれあい体験を持つことの重要性が示唆される。

キーワード：赤ちゃん、イメージ因子、かかわり意識、児との接触経験、おもいやり

はじめに

少子・核家族化の環境で育ってきた現代の若者は、生活体験が乏しく、乳児に接することが少ない為、乳児を

具体的にイメージすることは難しい現状である。自分の子どもを育てる以前に、乳幼児の世話をした者は少なく、育児経験不足から育児不安に陥ることも報告されている¹⁾。育児不安から育児ストレスの増大、さらにはわが子への虐待の増加といった負の連鎖が社会問題となっている。

K・E ボウルディング²⁾は、行動がイメージに依存しているとされ、過去経験の総合的結果としてイメージができあがる、と述べている。乳児との接触経験がほとん

2009年6月1日受付

2009年10月30日受理

別刷請求先：中越利佳, 〒791-2101 愛媛県伊予郡砥部町高尾田543
愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

どない若者にとって、乳児を具体的にイメージすることは難しい。現実の乳児ではなく TV や雑誌などのかわいらしい赤ちゃんの映像などの情報から、現在の若者の赤ちゃんイメージが形成されていると考えられる。

クラウスとケネル³⁾は、自分が想像していた子どもに対する幻想を、現実自分が産み落としたわが子と和解させなければならない、と述べている。すなわち、母親の想像していた理想的で完璧な子どもと、現実自分の前にいる子どもの姿を融合させる必要性を説明している。現実の児とイメージした児のギャップが大きいほど児の受け入れが困難であり、児との関係形成に時間を要する。

したがって育児支援の観点から、現代の女子学生が抱く赤ちゃん像を知ることが必要であると考えられる。女子学生の赤ちゃんイメージ^{4,7-9)}に関する研究はいくつかあるが、思いやりや児への関わり意識との関連をみたものはほとんどない。

女子学生の赤ちゃん像と思いやりや児への関わり意識の関係性を明らかにすることは、赤ちゃんに対するイメージと児に対する関わりをより肯定的に変容させる支援の在り方を検討する上において、基礎的資料になると考える。

目 的

本研究の目的は、女子学生が描く赤ちゃんのイメージ構造とそれらに関連する要因を明らかにすることである。さらに看護学生と他学科学生との比較検討をとおして、親役割準備教育の在り方を検討する基礎的資料とすることを目的とする。

方 法

(用語の定義)

「児」：赤ちゃんの定義をしないで、学生の描く赤ちゃんの範囲で回答を求めた児。乳児および幼児の総称。

1. 調査期間

2008年7月～10月

2. 調査方法

自記式質問紙法とした。学生が集合する講義教室において、研究の目的、倫理的配慮を口頭で説明した後、調

査用紙を配布し無記名で記入されたものを回収する集合調査とした。倫理的配慮として、質問紙の回答は、無記名で対象者が特定されないこと、調査への参加は自由意志であること、答えたくないことについては答えなくてよいこと、参加しても途中でやめてもよいこと、結果は統計的に処理し個人は特定されないこと、研究目的以外に使用しないことを文書に明記し口頭でも説明し、質問紙の回収をもって同意とした。回収された質問紙は、研究者の研究室に保管し、論文作成後はシュレッダー裁断およびデータの消去を行う。

使用尺度は、作成者に研究の目的と調査対象者を説明し、使用許可を得た。

なお本研究は、愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

3. 調査対象者

看護学生：A 県内にある B 総合大学、C 医療系大学、3 年課程の D・E 看護専門学校の 1 年生

他学科学生：F 地区の全大学・短期大学で組織される大学コンソーシアムが主催する 1 年生を対象とした夏休みに開催される特別講義(単位認定)に出席した学生

対象者の均一化を図る為、21歳以上、男性、既婚学生と子どもを有する学生を対象者から除外した。有効回答の得られた者(有効回答率65.2%)300名を分析対象者とした。

4. 調査内容

調査項目の内容とカテゴリーは表1、表2に記す。個人的属性と乳児との接触経験・8項目(プレ調査により接触経験項目と回数を決定)、赤ちゃんと聞いてどれくらいまでの時期の子どものこととイメージするか(以下、赤ちゃんの範囲と記す)、野村らの研究⁴⁾を参考に独自で作成した赤ちゃんイメージ(SD法、36対の形容詞項目)、思いやり尺度⁵⁾(内田、2001の22項目)、乳幼児に対する関わり意識尺度⁶⁾(松村、2005)で、調査対象者の背景にみあった項目を抜粋し、さらに自ら作成した2項目を加えた25項目とした。(本研究では、これ以降この尺度を「児に対する関わり意識尺度」として記す。)

5. 分析方法

赤ちゃんイメージは、肯定的イメージを5点、否定的

表1 調査項目の内容とカテゴリー①

要因群	項目	カテゴリー
属性	年齢	実数
	性別	1. 男性 2. 女性
	配偶者	1. あり 2. なし
	学年	1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生
	学部	自主記載
	きょうだいの数	1. 1人 (一人っ子) 2. 2人 3. 3人 4. 4人以上
	出生順位	1. 第1子 2. 第2子 3. 第3子 4. 第4子以降
接触経験	抱っこ	1. なし 2. 1回 3. 2～3回 4. それ以上
	おむつ交換	
	離乳食を与える	
	泣いている児をあやす	
	児の着替え	
接触対象児との関係		1. ふれあい体験 2. きょうだいの子 3. 親戚の子 4. 近隣の子 5. 友人の子 6. その他 (きょうだい等)
範囲	赤ちゃん	1. 這い這いまで 2. 一人立ちまで 3. 一人歩きまで 4. 一語文を話すまで 5. ミルクを飲んでいる間 6. おむつをしている間
	イメージ	あたたかいーつめたい 赤いー赤くない (SD法5段階評定) うれしいーかなしい いとおしいー憎らしい 1. とても (1点) すがすがしいーうっとおしい いじらしいーみっともない 2. やや (2点) 白いー白くない すばらしいーひどい 3. どちらともいえない (3点) 甘いーすっぱい 強いー弱い 4. やや (4点) 明るいー暗い けなげーふてぶてしい 5. とても (5点) まるいー四角い 生き生きしたー生氣のない ほほえましいー憎らしい 単純なー複雑な 初々しいーひねた 怖くないー怖い やわらかいーかたい のびのびとしたーこせこせした 黄色いー黄色くない 落ち着いたー落ち着きのない 活発なーおとなしい きちんとしたーだらしない 楽しいー苦しい 丁寧なー雑な おもしろいーつまらない 素直なーひねくれた みずみずしいーかさかさ 親しみやすいー親しみにくい やさしいーきびしい 繊細なー武骨な 大きいー小さい 元気なー元気のない めざわりでないーめざわりな 美しいーきたない

イメージを1点とし、SD法にて5段階で得点化した。児に対する関わり意識は「全くそのとおり」を5点、「全く違う」を1点とした5段階で得点化し、因子分析(主因子法)より因子の抽出を行い、Cronbachの α 係数にて信頼性の検討を行った。イメージ因子と接触経験、児に対する関わり意識尺度得点、思いやり得点、赤ちゃん

の範囲は、一元配置分散分析とBonferroniによる多重比較を行った。関連性は、ピアソンの積率相関係数を用いた。看護学生と他学科学生の比較は、 χ^2 検定とstudent-t-testを用いた。

統計解析は統計ソフトSPSS(Ver13.0)を使用し、有意水準は5%以下とした。

表2 調査項目の内容とカテゴリー②

要因群	項目	カテゴリー
思いやり尺度	・自分は涙もろいほうだとは思わない	全く当てはまらない（1点）
	・一生懸命やっても失敗すれば意味はないと思う	非常に当てはまる（5点）
	・つらい思いをしている人のために祈るような気持ちになることがある	2極間を5段階評価尺度とするSD法
	・試合で自分が勝つためなら相手が怪我をしても容赦しない	
	・頑張っている人を見ると応援したくなるほうだ	
	・情にほだされたくない	
	・もらい泣きしやすいほうだ	
	・人が失敗した場合その人に責任があるので同情の必要はない	
	・バスや電車でお年寄りや障害のある方が立っていたら、席を譲ってあげないと可哀想だと感じる	
	・人のつらい話を聞いても心からは同情できない	
	・仲間に入れない人がいてもそれはその人の責任だと思う	
	・泣いている子どもをみたら、ついやさしく声をかけたくなる	
	・いわゆる“お涙頂戴もの”の映画は好きではない	
	・人を思いやることが何よりも大切だと思う	
	・自分が物事が順調な場合、そうでない友人のことを思うと、申し訳なく感じる	
	・人に対しては常に親切でいようと思う	
	・自転車が将棋倒しになっているのをみたら、起こしてあげたいと思う	
	・ニュースで事故などの報道に接すると心が痛んでしまう	
	・一人一人の主張がぶつかることによって傷つく人がいても、仕方がないと思う	
	・弱い立場にある人も自分で何とかするべきだ	
・苦労話を聞くと心を打たれる		
・映画やテレビドラマを見てよく泣く		
児に対する関わり意識尺度	・楽しみや趣味を持ってない	全く違う（1点）
	・何かものたりない	全くそのとおり（5点）
	・気持ちが安定する	2極間を5段階評価尺度とするSD法
	・自分を優しい人間にする	
	・自分の表情を豊かにする	
	・自分の思い通りにできない	
	・自分も成長する	
	・かわいいので抱きしめたい	
	・イライラする	
	・自分が親になることがイメージできる	
	・一緒にいると毎日に充実感がある	
	・自分は乳幼児と関わることに適していない	
	・よく泣くので関わりたくない	
	・活動が制限されてつまらない	
	・乳幼児と一緒にでは気分転換できない	
	・いとおしく守ってあげたい	
	・乳幼児と関わりると疲れる	
	・人工妊娠中絶はやむをえない	
	・視野が狭くなる	
	・乳幼児に一番の関心がある	
・乳幼児と一緒にでは我慢することが多い		
・おむつ交換など汚い世話はしたくない		
・世間から取り残される		
・乳幼児と一緒に楽しい		
・乳幼児と関わっているときが自分らしい		

結 果

1. 対象者の特徴

(1) 属性と接触経験, 赤ちゃんの範囲について

対象者の平均年齢は18.6 (±0.63) 歳であった。きょうだいの人数の平均は2.4 (±0.80) 人, 出生順位は第1子が66.6%, 第2子が26.6%, 第3子が5.5%であった。学生の専攻の内訳は, 看護学生165人 (55.0%), 法文学系学生73人 (24.3%), 教育系27人 (9.0%) であった (表3)。

		N=300	
項目		人数	(%)
きょうだい人数	1人	34	(11.3)
	2人	138	(46.0)
	3人	102	(34.0)
	4人以上	26	(8.7)
出生順位	第1子	195	(65.0)
	第2子	77	(25.7)
	第3子	16	(5.3)
	第4子以降	4	(1.3)
	無回答	8	(2.7)
学部	看護	165	(55.0)
	法文	73	(24.3)
	教育	27	(9.0)
	工学	14	(4.7)
	経済	10	(3.3)
	その他	11	(3.7)

児との接触経験回数と人数, 接触した児との関係については表4に記す。抱っこや泣いている子をあやした経験がある学生は60%以上であったのに対し, おむつ交換, 離乳食を食べさせる, 服の着替えは60%以上の学生が経験していなかった。全ての項目に経験なしと答えた者は, 38人であった。

接触した児との関係では, 約60%がきょうだいや親せき等近親者の子どもであった。

赤ちゃんの範囲については表5に記す。「一人歩き」「一語文を話す」など1歳すぎの子どもをイメージしている者が約40%を占めた。

(2) 赤ちゃんイメージの因子構造

赤ちゃんのイメージの因子構造を知る為に, 質問紙の36項目の形容詞対に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況(5.86, 2.44, 1.96, 1.72…)

から, 3因子構造が妥当であると考えられた。

3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果十分な因子負荷量を示さなかった12項目を分析から除外し, 再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関, 固有値, 寄与率は表6-1に示す。3因子の累積寄与率は46.68%であった。

第I因子は, 13項目で構成されており, 「丸い—四角い」「明るい—暗い」「初々しい—ひねた」といった情緒的な内容の形容詞対が高い負荷量を示しており「情緒性」と命名した。

第II因子は, 8項目で構成され, 「めざわりでない—めざわりな」「楽しい—苦しい」「怖くない—怖い」「いとおいしい—憎らしい」などの形容詞対において, 児に対する肯定的な形容詞が高い負荷量を示した為, 「好感度」と命名した。

第III因子は, 「きちんとした—だらしない」「丁寧な—雑な」「落ち着いた—落ち着きのない」の3項目で構成された。これは, 児の内面的な人格をもった一人の人間として認識していく過程において得られるイメージであると考え, 「意思性」と命名した。

3つの下位尺度に相当する項目の平均点を算出し, 「情緒性」下位尺度得点 (M4.47, SD0.44), 「好感度」下位尺度得点 (M4.36, SD0.55), 「意思性」下位尺度得点 (M3.02, SD0.77) とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出した。「情緒性」で $\alpha=0.85$, 「好感度」で $\alpha=0.79$, 「意思性」で $\alpha=0.67$ と妥当であった。3つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した ($p<.01$) (表6-2)。

(3) 児に対する関わり意識の構造

児に対する関わり意識の因子構造を知る為に, 25項目を主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況(7.29, 2.24, 1.47, 1.17…)により, 3因子構造が妥当であると考えられた。

3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果十分な因子負荷量を示さなかった5項目を分析から除外し, 再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関, 各因子の固有値, 寄与率は表7-1のとおりであり, 3因子累積寄与率は54.98%であった。

第I因子は, 7項目で構成されており, 「自分の表情を豊かにする」「自分を優しい人間にする」「かわいいの

表4 接触経験

項目	接触回数	全体人数 (n=300)	(%)	学部別			
				看護学生		他学科学生	
				n=165	(%)	n=135	(%)
抱っこ	なし	38	(12.7)	19	(11.5)	19	(14.0)
	1回	12	(4.0)	8	(4.8)	4	(3.0)
	2回～3回	52	(17.3)	30	(18.2)	22	(16.3)
	それ以上	182	(60.7)	101	(61.3)	81	(60.0)
	無回答	16	(5.3)	7	(4.2)	9	(6.7)
おむつ交換	なし	201	(67.0)	107	(64.8)	94	(69.6)
	1回	16	(5.3)	12	(7.3)	4	(3.0)
	2回～3回	32	(10.7)	18	(10.9)	14	(10.4)
	それ以上	46	(15.3)	26	(15.8)	20	(14.8)
	無回答	5	(1.7)	2	(1.2)	3	(2.2)
離乳食を食べさせた	なし	197	(65.6)	110	(66.7)	87	(64.4)
	1回	22	(7.3)	13	(7.9)	9	(6.7)
	2回～3回	23	(7.7)	11	(6.6)	12	(8.9)
	それ以上	50	(16.7)	28	(17.0)	22	(16.3)
	無回答	8	(2.7)	3	(1.8)	5	(3.7)
泣いている児をあやした	なし	94	(31.3)	48	(29.1)	46	(34.1)
	1回	19	(6.3)	13	(7.9)	6	(4.4)
	2回～3回	61	(20.3)	44	(26.7)	17	(12.6)
	それ以上	101	(33.8)	52	(31.5)	49	(36.3)
	無回答	25	(8.3)	8	(4.8)	17	(12.6)
服の着替え	なし	178	(59.4)	99	(60.0)	79	(58.5)
	1回	10	(3.3)	5	(3.0)	5	(3.7)
	2回～3回	34	(11.3)	17	(10.3)	17	(12.6)
	それ以上	69	(23.0)	40	(24.3)	29	(21.5)
	無回答	9	(3.0)	4	(2.4)	5	(3.7)
接触をした児との関係 (複数回答)	ふれあい体験	54	(14.4)	25	(12.3)	29	(16.8)
	きょうだいの子	66	(17.6)	33	(16.3)	33	(19.1)
	親戚の子	169	(44.9)	101	(49.8)	68	(39.3)
	近隣の子	61	(16.2)	32	(15.8)	29	(16.8)
	友人の子	13	(3.5)	7	(3.4)	6	(3.5)
	その他(きょうだい等)	13	(3.5)	5	(2.5)	8	(4.6)

表5 赤ちゃんの範囲

範囲	全体人数 (n=300)	(%)	看護学生		他学科学生	
			(n=165)	(%)	(n=135)	(%)
這い這いまで	57	(19.0)	42	(25.5)	15	(11.1)
一人立ちまで	53	(17.7)	26	(15.8)	27	(20.0)
一人歩きができるまで	72	(24.0)	34	(20.6)	38	(28.2)
一語文を話すまで	44	(14.7)	13	(7.9)	31	(23.0)
母乳(ミルク)を飲んでいる間	39	(13.0)	24	(14.5)	15	(11.1)
おむつをしている間	29	(9.6)	21	(12.7)	8	(5.9)
無回答	6	(2.0)	5	(3.0)	1	(0.7)

表6-1 赤ちゃんイメージ因子構造

N=300

項目	因子負荷量			共通性	M	SD
	I	II	III			
<情緒性> $\alpha=0.85$						
丸い-四角い	0.77	-0.10	-0.07	0.48	4.68	0.60
明るい-暗い	0.74	-0.10	0.12	0.54	4.36	0.79
初々しい-ひねた	0.71	-0.04	-0.03	0.49	4.76	0.61
やわらかい-硬い	0.67	0.01	-0.22	0.56	4.88	0.41
甘い-すっぱい	0.61	-0.18	0.20	0.38	3.98	0.93
暖かい-冷たい	0.61	0.18	-0.14	0.56	4.81	0.49
繊細な-武骨な	0.55	-0.02	0.11	0.36	4.44	0.82
みずみずしい-かさかさ	0.50	-0.14	0.01	0.29	4.61	0.69
白い-白くない	0.47	-0.10	0.12	0.30	4.13	0.94
すがすがしい-うっとおしい	0.42	0.17	0.23	0.43	3.75	0.98
のびのびとした-こせこせした	0.41	0.22	-0.03	0.40	4.41	0.76
元気な-元気がない	0.39	0.19	0.01	0.37	4.55	0.65
生き生きとした-生氣のない	0.36	0.30	0.00	0.42	4.70	0.57
<好感度> $\alpha=0.79$						
めざわりでない-めざわりな	-0.17	0.76	0.02	0.45	4.57	0.86
楽しい-苦しい	-0.06	0.69	0.06	0.42	4.34	0.82
怖くない-怖い	-0.05	0.69	-0.01	0.40	4.28	1.03
いとおい-憎らしい	0.12	0.63	-0.01	0.49	4.71	0.57
親しみやすい-親みにくい	-0.02	0.61	0.23	0.53	4.04	0.94
ほほえましい-憎らしい	0.29	0.41	-0.15	0.60	4.82	0.51
単純な-複雑な	-0.13	0.38	0.03	0.24	3.56	1.26
うれしい-悲しい	0.22	0.38	-0.04	0.47	4.54	0.74
<意思性> $\alpha=0.67$						
きちんとした-だらしない	0.13	0.02	0.73	0.47	3.21	0.92
丁寧な-雑な	0.16	-0.02	0.66	0.43	3.32	0.95
落ち着いた-落ち着きのない	-0.28	0.20	0.43	0.27	2.54	1.11
因子間相関	I	II	III			
	I	-	0.60	0.19		
	II	0.60	-	0.24		
	III	0.19	0.24	-		
固有値	7.31	2.16	1.74			
寄与率	30.44	8.99	7.24			
累積寄与率 (%)	30.44	39.44	46.68			

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表6-2 赤ちゃんイメージ下位尺度間相関

N=300

	情緒性	好感度	意思性	M	SD
情緒性	-	0.55**	0.21**	4.47	0.44
好感度	0.55**	-	0.27**	4.36	0.55
意思性	0.21**	0.27**	-	3.02	0.77

** $p<.01$

Pearson correlation coefficient

表7-1 児に対するかかわり意識の構造

N=300

項目	因子負荷量			共通性	M	SD
	I	II	III			
<育児肯定> $\alpha=0.89$						
自分の表情を豊かにする	0.95	0.07	-0.13	0.69	4.18	1.06
自分を優しい人間にする	0.92	0.11	-0.13	0.67	4.09	1.06
かわいいので抱きしめたい	0.79	-0.06	-0.02	0.63	4.32	1.06
自分も成長する	0.78	0.05	-0.05	0.56	4.30	0.92
気持ちが安定する	0.48	0.03	0.24	0.50	3.20	1.09
一緒にいると毎日に充実感がある	0.46	0.07	0.23	0.54	3.65	1.10
いとおしく守ってあげたい	0.43	-0.14	0.25	0.55	4.24	0.96
<育児行動不満> $\alpha=0.84$						
活動が制限されてつまらない	-0.05	0.85	0.13	0.58	2.15	1.08
乳幼児と一緒に気分転換できない	0.05	0.73	-0.04	0.50	2.17	1.03
乳幼児とかかかわると疲れる	-0.05	0.69	-0.06	0.48	2.75	1.11
乳幼児と一緒に我慢することが多い	0.11	0.65	-0.16	0.30	3.08	0.98
よく泣くので関わりたくない	-0.21	0.64	-0.05	0.68	1.88	1.03
自分の思い通りにできない	-0.23	0.53	0.03	0.24	2.62	0.97
おむつ交換など汚い世話はしたくない	-0.02	0.41	-0.11	0.32	2.11	0.97
自分は乳幼児とかかわることに適していない	-0.01	0.41	-0.34	0.50	2.44	1.12
世間から取り残される	-0.03	0.38	-0.09	0.27	2.01	1.01
<乳幼児志向> $\alpha=0.73$						
乳幼児と関っているときが自分らしい	-0.13	0.06	0.84	0.45	3.08	1.03
乳幼児に一番の関心がある	-0.12	0.06	0.77	0.40	2.93	1.16
乳幼児と一緒に楽しい	0.10	-0.13	0.57	0.51	4.20	0.96
自分が親になることがイメージできる	0.06	0.06	0.54	0.33	2.98	1.36
因子間相関						
	I	II	III			
I	-	-0.53	0.59			
II	-0.53	-	-0.63			
III	0.59	-0.63	-			
固有値	7.29	2.23	1.47			
寄与率	36.47	11.17	7.33			
累積寄与率 (%)	36.47	47.64	54.98			

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

で抱きしめたい」といった育児に対して肯定的な内容が高い負荷量を示しており「育児肯定」と命名した。

第II因子は、9項目で構成され、「活動が制限されてつまらない」「乳幼児と一緒に気分転換できない」「乳幼児と関わると疲れる」など育児行動に対する不満内容が高い負荷量を示した為、「育児行動不満」と命名した。

第III因子は、「乳幼児と関わっている時が自分らしい」「乳幼児に一番の関心がある」「乳幼児と一緒に楽しい」など4項目で構成された。乳幼児に対して興味関心が高い内容がみられた為、「乳幼児志向」と命名した。

因子間相関から、第II因子は、第Iと第III因子と負の相関がみられ、逆転因子であった。したがって、第II因子の「育児行動不満」の因子項目を逆転項目であると考え、得点換算し3因子の得点が高いほど児に対する関わり意識が高くなるように操作した。

児に対する関わり意識尺度の3つの下位尺度に相当する項目の平均点を算出し、「育児肯定」下位尺度得点 (M 4.00, SD0.80), 「育児行動不満」下位尺度得点 (M3.56, SD0.69), 「乳幼児志向」下位尺度得点 (M3.29, SD0.84) とした。

内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出した。「育児肯定」で $\alpha=0.89$,「育児否定」で $\alpha=0.84$,「乳幼児志向」で $\alpha=0.73$ と十分な値を示した。3つの下位尺度は互いに有意な強い正の相関を示した($p<.01$) (表7-2)。

(4) 思いやり得点

思いやり尺度の22項目について、それぞれ5段階で得点化し、合計得点を思いやり得点とした。対象者の思いやり得点の平均点は、 75.90 ± 10.31 点、最高得点106点、

最低得点39点であった(表8・表9)。

(5) 下位因子間相関

各尺度の下位因子間の相関については、表8に記す。「情緒性」は「好感度」と中程度の正の相関($r>0.5$)を示した。「好感度」は、「育児肯定」「乳幼児志向」と弱い正の相関($r>0.4$)を示し、「育児行動不満(逆転因子、得点が高いほど不満は低い)」と中程度の正の相関($r>0.5$)を示した。「意思性」はどの下位因子とも、有意な相関関係を示さなかった。

表7-2 児に対する関わり意識の下位尺度間相関

N=300

	育児肯定	育児行動不満	乳幼児志向	M	SD
育児肯定	—	0.50**	0.52**	4.00	0.80
育児行動不満	0.50**	—	0.52**	3.56	0.69
乳幼児志向	0.52**	0.52**	—	3.29	0.84

** $p<.01$

Pearson correlation coefficient

(注)〈育児行動不満〉は得点が高いほど不満が低いことを示す

表8 各尺度の下位因子間相関

N=300

	1	2	3	4	5	6	7	M	SD
1. 情緒性	—	0.55**	0.21**	0.33**	0.27**	0.30**	0.20**	4.47	0.44
2. 好感度	0.55**	—	0.26**	0.44**	0.51**	0.49**	0.29**	4.36	0.55
3. 意思性	0.21**	0.26**	— **	0.06	0.16**	0.12*	0.04	3.02	0.77
4. 育児肯定	0.33**	0.44**	0.06	—	0.49**	0.52**	0.28**	4.00	0.80
5. 育児行動不満	0.27**	0.51**	0.16*	0.49**	—	0.52**	0.33**	3.56	0.69
6. 乳幼児志向	0.30**	0.49**	0.12**	0.52**	0.52**	—	0.30**	3.29	0.84
7. 思いやり得点	0.20**	0.29**	0.04	0.28**	0.33**	0.30**	—	75.90	10.31

* $p<.05$, ** $p<.01$

Pearson correlation coefficient

(注)〈育児行動不満〉は得点が高いほど不満が低いことを示す

表9 看護学生と他学科学生のイメージ因子得点・思いやり得点・児に対するかかわり意識の比較

N=300

下位因子	看護学生 (n=165)		他学科学生 (n=135)		t 値
	M	SD	M	SD	
情緒性	4.48	0.44	4.45	0.44	0.72
好感度	4.38	0.50	4.32	0.61	0.91
意思性	3.00	0.76	3.05	0.78	-0.55
育児肯定	4.02	0.79	3.97	0.80	0.47
育児行動不満	3.68	0.63	3.41	0.73	3.42**
乳幼児志向	3.38	0.82	3.18	0.86	1.98*
思いやり得点	81.34	9.85	69.59	6.56	12.14**

* $p<.05$, ** $p<.01$

Student's-t-test

(注)〈育児行動不満〉は得点が高いほど不満が低いことを示す

2. 看護学生と他学科学生の比較

看護学生 (165人) と看護以外の学生を他学科学生 (135人) として比較した。

(1) 児との接触経験と接触児との関係、赤ちゃん範囲について

接触経験頻度や児との関係性では両者に有意差はみられなかった。赤ちゃん範囲の比較では、 $\chi^2=27.03$ ($p<.01$) と有意差がみられた。特に他学科学生は月齢の大きい児をイメージする傾向が見られた。

(2) 赤ちゃんイメージ下位因子得点と児に対する関わり意識得点、思いやり得点比較

看護学生と他学科学生の赤ちゃんイメージ因子得点と児に対する関わり意識の下位因子得点、思いやり得点の比較は表9に記す。有意な差がみられたものは、「育児行動不満」【 $t=3.42$, $p<.01$ 】、「乳幼児志向」【 $t=1.98$, $p<.05$ 】、「思いやり得点」【 $t=12.14$, $p<.01$ 】であった。いずれも看護学生が高い得点を示した。しかし、赤ちゃんイメージの因子得点に有意差はみられなかった。

(3) 思いやり得点群別赤ちゃんイメージ因子の比較

看護学生の思いやり得点の平均点は 81.34 ± 9.85 点、他学科学生の平均点は 69.59 ± 6.56 点であった。全体の思いやり得点分布を4分位し、25%タイル値68点以下を低得点群 (62人)、75%タイル値82点以上を高得点群 (66人)、その他を中間点群 (172人) とした。

看護学生と他学科学生別に思いやり得点群別赤ちゃんイメージ因子得点を比較した。結果は表10-1、10-2に記す。他学科学生は、思いやり得点群による赤ちゃんイメージに有意差がみられなかった。看護学生では、思

いやり高得点群が中得点群に比べ「情緒性」が有意に高く、「好感度」では、中得点群、低得点群に比べ高得点群が有意に高いイメージ得点を示した。

3. 乳児接触経験、赤ちゃんの範囲とイメージ因子、児に対するかかわり意識、思いやりとの関連

(1) 対象者全体の特徴

対象者の乳児との接触経験の頻度、赤ちゃんの範囲とイメージ因子との関連については表11に記す。属性と接触体験別に下位尺度得点を算出し、一元配置分散分析を行い、有意な差を認められた群に対しては多重比較を行った。きょうだいの数と出生順位は、イメージ因子に有意な差はみられなかった。

抱っこ経験で、「好感度」は、経験なし群が2~3回経験した群、3回以上経験した群に比べて、得点が有意に低かった ($p<.05$)。泣いている児をあやした経験では、「好感度」で、2~3回経験した群が経験なし群よりも有意に高い得点を示し ($p<.05$)、「意思性」では、1回経験した群が経験なし群、2~3回経験群、3回以上経験群に比べ、有意に高い得点であった ($p<.05$)。

赤ちゃんの範囲では、「好感度」で、這い這いまでとした群と比べ、一人歩きまでとした群が有意に高い得点を示した ($p<.05$)。

接触体験とかかわり意識、思いやり得点との関係については、表12に記す。抱っこ経験では、経験なし群に比べ3回以上経験した群が「育児肯定」で有意に高い得点を示した ($p<.01$)。さらに2~3回経験した群とそれ以上経験した群は経験なし群に比べ「育児行動不満」が

表10-1 看護学生・思いやり得点群別イメージの比較 (n=165)

下位尺度	思いやり得点	M	SD	F 値
情緒性	高得点群 (n=64)	4.65	0.31	7.74**
	中得点群 (n=90)	4.38	0.49	
	低得点群 (n=11)	4.39	0.38	
好感度	高得点群 (n=64)	4.57	0.38	9.00**
	中得点群 (n=90)	4.28	0.50	
	低得点群 (n=11)	4.10	0.69	
意思性	高得点群 (n=64)	3.10	0.75	0.89
	中得点群 (n=90)	2.94	0.78	
	低得点群 (n=11)	2.91	0.63	

* $p<.05$, ** $p<.01$
ANOVA, Bonferroni

表10-2 他学科学生・思いやり得点群別イメージの比較 (n=135)

下位尺度	思いやり得点	M	SD	F 値
情緒性	高得点群 (n=2)	4.12	0.60	0.83
	中得点群 (n=82)	4.47	0.42	
	低得点群 (n=51)	4.42	0.46	
好感度	高得点群 (n=2)	4.75	0.00	0.76
	中得点群 (n=82)	4.35	0.58	
	低得点群 (n=51)	4.27	0.67	
意思性	高得点群 (n=2)	3.33	0.00	0.31
	中得点群 (n=82)	3.08	0.82	
	低得点群 (n=51)	2.99	0.74	

ANOVA (n.s)

表11 接触経験・赤ちゃん範囲とイメージ因子の関連

属性・体験内容	項目・回数	イメージ因子					
		情緒性		好感度		意思性	
		M	SD	M	SD	M	SD
抱っこ (n=284)	なし	4.40	0.45	4.04	0.80	2.82	0.83
	1回	4.44	0.42	4.29	0.71	3.47	0.56
	2回～3回	4.53	0.34	4.38	0.46	3.14	0.67
	それ以上	4.46	0.46	4.41	0.49	2.99	0.75
	F 値	0.59		4.92**		2.90*	
おむつ交換 (n=295)	なし	4.46	0.42	4.33	0.57	3.03	0.78
	1回	4.63	0.30	4.36	0.47	2.94	0.59
	2回～3回	4.46	0.48	4.52	0.47	3.10	0.89
	それ以上	4.45	0.53	4.38	0.57	2.91	0.71
	F 値	0.82		1.08		0.50	
離乳食を食べさせた (n=292)	なし	4.45	0.44	4.29	0.59	3.03	0.79
	1回	4.62	0.27	4.55	0.30	3.09	0.84
	2回～3回	4.43	0.35	4.55	0.29	2.96	0.59
	それ以上	4.46	0.53	4.43	0.59	2.99	0.79
	F 値	1.06		2.88*		0.16	
泣いている児をあやした (n=275)	なし	4.45	0.43	4.22	0.66	2.99	0.76
	1回	4.64	0.37	4.50	0.40	3.54	0.88
	2回～3回	4.46	0.35	4.36	0.45	2.97	0.73
	それ以上	4.47	0.46	4.44	0.52	2.99	0.76
	F 値	1.06		3.12*		3.20*	
服の着替え (n=291)	なし	4.48	0.40	4.34	0.58	3.05	0.80
	1回	4.49	0.51	4.23	0.59	2.73	0.62
	2回～3回	4.49	0.42	4.35	0.57	3.00	0.73
	それ以上	4.43	0.50	4.43	0.50	2.99	0.73
	F 値	0.29		0.67		0.60	
赤ちゃんの範囲 (n=294)	這い這いまで	4.33	0.58	4.18	0.68	3.06	0.68
	一人立ちまで	4.51	0.41	4.42	0.53	3.15	0.71
	一人歩きまで	4.47	0.38	4.30	0.56	2.90	0.81
	一語文を話す	4.58	0.34	4.30	0.56	3.10	0.70
	母乳(ミルク)を飲んでいる間	4.43	0.43	4.40	0.45	3.04	0.83
	おむつをしている間	4.56	0.38	4.37	0.52	2.78	0.79
	F 値	2.15		2.97*		1.41	

* $p < .05$, ** $p < .01$
ANOVA, Bonferroni

有意に高い得点であった ($p < .01$)。「育児行動不満」は逆転因子で得点変換していることから、経験回数が多いほど育児行動に不満を抱いていないことが示された。また「乳幼児志向」では、経験なし群は3回以上経験あ

り群に比べて有意に低い得点であった ($p < .05$)。

おむつ交換経験では、1回経験した群と2～3回経験した群が経験なし群に比べて、「育児行動不満」の得点有意に高く ($p < .01$)、さらに2～3回経験した群が

表12 接触経験・赤ちゃん範囲と児に対するかかわり意識、思いやり得点との関連

経験・範囲	項目・回数	児に対するかかわり意識						思いやり得点	
		育児肯定		育児行動不満		乳幼児志向		M	SD
		M	SD	M	SD	M	SD		
抱っこ (n=284)	無	3.56	1.00	2.98	0.72	2.89	0.97	72.11	10.57
	1回	3.76	0.62	3.42	0.68	2.73	0.66	74.73	10.17
	2回～3回	3.99	0.74	3.60	0.62	3.30	0.85	76.37	10.56
	それ以上	4.12	0.75	3.68	0.64	3.42	0.79	76.67	10.18
	F 値	5.80**		12.2**		6.34**		2.04	
おむつ交換 (n=295)	無	3.93	0.82	3.47	0.70	3.22	0.86	75.12	10.10
	1回	4.17	0.64	3.94	0.58	3.50	0.63	80.69	11.49
	2回～3回	4.31	0.64	3.88	0.58	3.73	0.77	78.13	11.69
	それ以上	4.00	0.83	3.60	0.65	3.28	0.79	76.35	9.62
	F 値	2.35		5.32**		3.84*		2.03	
離乳食を食べ させた (n=292)	無	3.95	0.78	3.48	0.70	3.18	0.85	75.47	10.51
	1回	4.03	1.02	3.72	0.71	3.65	0.72	78.35	10.03
	2回～3回	4.15	0.69	3.86	0.53	3.60	0.68	76.87	12.21
	それ以上	4.09	0.85	3.66	0.68	3.50	0.83	76.70	9.02
	F 値	0.73		3.25*		4.74**		0.63	
泣いている児 をあやした (n=275)	無	3.74	0.91	3.32	0.77	3.09	0.88	73.04	10.89
	1回	4.11	0.91	3.57	0.77	3.45	1.00	79.11	8.20
	2回～3回	4.15	0.57	3.65	0.54	3.31	0.81	78.36	9.57
	それ以上	4.09	0.78	3.74	0.65	3.45	0.77	76.89	10.18
	F 値	4.44**		6.61**		3.33*		4.41**	
服の着替え (n=291)	無	3.95	0.80	3.46	0.73	3.24	0.88	75.92	10.49
	1回	3.77	0.92	3.61	0.56	3.40	0.93	76.60	12.08
	2回～3回	4.20	0.72	3.77	0.61	3.43	0.74	76.25	9.51
	それ以上	4.09	0.76	3.70	0.60	3.40	0.76	76.63	9.33
	F 値	1.52		3.24*		0.95		0.09	
赤ちゃんの 範囲 (n=294)	這い這いまで	3.65	0.92	3.27	0.74	3.03	0.78	73.38	11.08
	一人立ちまで	3.98	0.80	3.63	0.65	3.30	0.88	76.23	8.91
	一人歩きまで	4.19	0.69	3.65	0.67	3.46	0.88	76.71	12.23
	一語文を話す	4.03	0.78	3.45	0.69	3.09	0.90	73.50	7.80
	母乳(ミルク)を飲んでいる間	4.04	0.77	3.60	0.75	3.49	0.83	77.47	10.65
	おむつをしている間	3.95	0.77	3.72	0.53	3.28	0.63	77.79	9.52
F 値	2.03*		1.93		1.82		1.23		

*p<.05, **p<.01

ANOVA, Bonferroni

(注) <育児行動不満> は得点が高いほど不満が低いことを示す

経験なし群に比べて「乳幼児志向」が有意に高い得点であった (p<.05).

泣いている児をあやす経験では、2～3回経験群と3回以上経験した群が経験なし群に比べ、「育児肯定」「育

児行動不満」が有意に高い得点であった (p<.05). さらに3回以上経験あり群は経験なし群に比べて、「乳幼児志向」が有意に高い得点を示した (p<.05). また「思いやり得点」が2～3回経験した群が経験なし群に比べ

て、有意に得点が高かった ($p < .05$).

赤ちゃんの範囲のとらえ方では、這い這いまでと答えた群が一人歩きまでと答えた群に比べ、「育児肯定」が有意に低い得点を示した ($p < .05$).

(2) 看護学生と他学科学生の比較

対象者全体で有意差がみられた「抱っこ」「おむつ交換」「泣いている児をあやした」「赤ちゃんの範囲」について、看護学生と他学科学生に分けて、一元配置分散分

析と多重比較を行った。結果は表13-1・2, 表14-1・2, 表15-1・2, 表16-1・2のとおりである。

①看護学生の特徴

看護学生に有意差がみられたものは「抱っこ」と「おむつ交換」の経験であった。結果は、表13-1, 表14-1に記す。

抱っこの経験別に因子得点を比較したところ、「好感度」【 $F(3, 154) = 3.74 \quad p < .01$ 】で、経験なし群に比

表13-1 看護学生・抱っこ経験別因子得点比較 n=158

因子	回数	M	SD	F 値
好感度	なし	4.03	0.70	3.74**
	1回	4.42	0.64	
	2回~3回	4.41	0.45	
	それ以上	4.43	0.42	
育児肯定	なし	3.41	1.07	5.52**
	1回	3.71	0.41	
	2回~3回	4.08	0.81	
	それ以上	4.14	0.69	
育児行動 不満	なし	2.98	0.67	10.72**
	1回	3.50	0.63	
	2回~3回	3.80	0.61	
	それ以上	3.77	0.55	
乳幼児志向	なし	2.75	0.72	8.95**
	1回	2.56	0.53	
	2回~3回	3.47	0.93	
	それ以上	3.53	0.73	

* $p < .05$, ** $p < .01$
ANOVA, Bonferroni

(注)〈育児行動不満〉は得点が高いほど不満が低いことを示す

表14-1 看護学生・おむつ交換経験別因子得点比較 n=163

因子	回数	M	SD	F 値
乳幼児 志向	なし	3.28	0.83	3.49*
	1回	3.48	0.66	
	2回~3回	3.93	0.76	
	それ以上	3.39	0.74	
育児行動 不満	なし	3.61	0.66	1.48
	1回	3.94	0.60	
	2回~3回	3.84	0.61	
	それ以上	3.72	0.53	

* $p < .05$
ANOVA, Bonferroni

(注)〈育児行動不満〉は得点が高いほど不満が低いことを示す

表13-2 他学科学生・抱っこ経験別因子得点比較 n=126

因子	回数	M	SD	F 値
好感度	なし	4.05	0.91	1.81
	1回	4.03	0.87	
	2回~3回	4.34	0.47	
	それ以上	4.39	0.57	
育児肯定	なし	3.71	0.92	1.36
	1回	3.86	1.00	
	2回~3回	3.86	0.63	
	それ以上	4.09	0.82	
育児行動 不満	なし	2.98	0.78	3.56*
	1回	3.25	0.85	
	2回~3回	3.33	0.53	
	それ以上	3.55	0.73	
乳幼児志向	なし	3.03	1.18	0.65
	1回	3.06	0.85	
	2回~3回	3.07	0.69	
	それ以上	3.28	0.86	

* $p < .05$
ANOVA, Bonferroni

(注)〈育児行動不満〉は得点が高いほど不満が低いことを示す

表14-2 他学科学生・おむつ交換経験別因子得点比較 n=132

因子	回数	M	SD	F 値
乳幼児 志向	なし	3.15	0.90	0.86
	1回	3.56	0.63	
	2回~3回	3.48	0.74	
	それ以上	3.13	0.84	
育児行動 不満	なし	3.31	0.72	4.00**
	1回	3.97	0.62	
	2回~3回	3.94	0.56	
	それ以上	3.45	0.76	

* $p < .05$, ** $p < .01$
ANOVA, Bonferroni

(注)〈育児行動不満〉は得点が高いほど不満が低いことを示す

表15-1 看護学生・泣いている児をあやした経験別因子得点比較
n=157

因子	回数	M	SD	F 値
育児行動 不満	なし	3.49	0.75	2.51
	1回	3.68	0.73	
	2回～3回	3.74	0.51	
	それ以上	3.82	0.54	
思いやり 得点	なし	78.75	11.68	1.33
	1回	82.62	7.43	
	2回～3回	82.59	7.49	
	それ以上	81.94	10.61	

ANOVA (n.s)

(注)〈育児行動不満〉は得点が高いほど不満が低いことを示す

表15-2 他学科学生・泣いている児をあやした経験別因子得点比較
n=118

因子	回数	M	SD	F 値
育児行動 不満	なし	3.15	0.76	3.89**
	1回	3.33	0.87	
	2回～3回	3.42	0.57	
	それ以上	3.66	0.74	
思いやり 得点	なし	67.59	6.47	3.70**
	1回	71.50	2.88	
	2回～3回	68.18	5.45	
	それ以上	71.52	6.28	

**p<.01

ANOVA, Bonferroni

(注)〈育児行動不満〉は得点が高いほど不満が低いことを示す

表16-1 看護学生・赤ちゃんの範囲と因子得点比較 n=160

因子	赤ちゃん範囲	M	SD	F 値
好感度	這い這い	4.17	0.65	1.40
	一人立ち	4.41	0.38	
	一人歩き	4.47	0.46	
	一語文を話す	4.38	0.50	
	母乳(ミルク)を飲んでいる間	4.53	0.39	
	おむつをしている間	4.40	0.47	
育児肯定	這い這い	3.81	0.84	1.04
	一人立ち	3.81	0.93	
	一人歩き	4.15	0.62	
	一語文を話す	3.97	0.85	
	母乳(ミルク)を飲んでいる間	3.79	0.99	
	おむつをしている間	4.23	0.36	

ANOVA (n.s)

表16-2 他学科学生・赤ちゃんの範囲と因子得点比較 n=134

因子	赤ちゃん範囲	M	SD	F 値
好感度	這い這い	4.02	0.64	3.00**
	一人立ち	4.30	0.55	
	一人歩き	4.50	0.48	
	一語文を話す	4.40	0.35	
	母乳(ミルク)を飲んでいる間	4.38	0.47	
	おむつをしている間	4.48	0.32	
育児肯定	這い這い	3.58	0.96	2.47*
	一人立ち	4.14	0.61	
	一人歩き	4.23	0.77	
	一語文を話す	4.19	0.58	
	母乳(ミルク)を飲んでいる間	4.20	0.55	
	おむつをしている間	3.84	0.86	

*p<.05, **p<.01

ANOVA, Bonferroni

べ、2～3回経験群と3回以上経験あり群が有意に高い得点を示した。「育児肯定」【F(3,154)=5.52 p<.01】では、経験なし群に比べ、2～3回経験群と3回以上経験あり群が有意に高い得点であった。また「育児行動不満」【F(3,154)=10.72 p<.01】は2～3回経験群と3回以上経験あり群が、経験なし群に比べ有意に高い得点であった。「育児行動不満」は逆転因子で、得点変換をしていることから、「育児行動不満」は低いことが示された。「乳幼児志向」【F(3,154)=8.95 p<.01】では、経験なし群に比べて、2～3回経験群と3回以上経験あり群が有意に高い得点であった。さらに1回経験群に比べ、2～3回経験群と3回以上経験あり群で、有意に高い得点を示した。

おむつ交換経験別に因子得点を比較したところ、「乳幼児志向」【F(3,159)=3.49 p<.05】で、経験なし群に比べ2～3回経験群が、有意に高い得点であった。

②他学科学生の特徴

他学科学生に有意差がみられたのは、「抱っこ」「おむつ交換」「泣いている児をあやした」「赤ちゃんの範囲」であった。結果は表13-2, 表14-2, 表15-2, 表16-2に記す。

接触経験では、抱っこを3回以上経験群が経験なし群と比べ、「育児行動不満」【F(3,122)=3.56 p<.05】が有意に高い得点を示した。

またおむつ交換を2回～3回経験した群は経験なし群と比べ、「育児行動不満」【F(3,128)=4.00 p<.01】

が有意に高かった。

泣いている児をあやした経験では、経験なし群に比較して、3回以上経験した群が有意に「育児行動不満」【F(3,114) = 3.89 p < .01】の得点が高かった。

「育児行動不満」は逆転因子であり、得点変換をしている為、以上の3つの接触経験では、育児行動不満が低いことが示された。

加えて、泣いている児をあやした経験では、「思いやり得点」【F(3,114) = 3.70 p < .01】も、経験なし群に比較して3回以上経験した群が有意に高かった。

赤ちゃんの範囲では、「好感度」【F(5,128) = 3.00 p < .01】で、一人歩きまでの児をイメージした者が、這い這いまでの児をイメージした者と比べ、有意に高い得点であった。また「育児肯定」【F(5,128) = 2.47 p < .05】では、這い這いまでの児をイメージした者に比べて、一人歩きまでの児をイメージした者が有意に高い得点を示した。

考 察

1. 赤ちゃんイメージの特徴

女子学生の赤ちゃんイメージは第Ⅰ因子が「情緒性」、第Ⅱ因子が「好感度」、第Ⅲ因子が「意思性」であった。「情緒性」下位尺度得点(M4.47, SD0.44)、「好感度」下位尺度得点(M4.36, SD0.55)「意思性」下位尺度得点(M3.02, SD0.77)から、第Ⅰ、第Ⅱ因子は肯定的にとらえ、第Ⅲ因子はやや否定的なイメージとして捉えていることが明らかになった。また「好感度」と「情緒性」は外見的イメージ、「意思性」は内面的イメージとして捉えており、赤ちゃんに対して外見と内面、肯定的と否定的の両側面からとらえていることが推察された。

細野ら⁷⁾は、看護系学生の赤ちゃんイメージは、肯定的・否定的側面とともに外見的・内面的イメージの両面を捉える傾向があり、非看護系学生が捉えるイメージは肯定的で外見的イメージを優先する傾向があると述べている。本研究の対象者の半数は看護学生が占めていることから、赤ちゃんイメージが肯定と否定、外見と内面の両面からとらえた結果になったと推察した。

しかし、看護学生と他学科学生のイメージ因子得点を比較した結果、両者において有意な差は見られなかった。従って、本研究の対象者の赤ちゃんイメージは概ね肯定的で、外見的イメージが優先しているものの、否定的な面や児の内面的イメージからも赤ちゃんをイメージして

いることが明らかになった。

2. 児に対する関わり意識の特徴

児に対する関わり意識の構造として、3因子が抽出された。第Ⅰ因子は「育児肯定」、第Ⅱ因子は「育児行動不満」、第Ⅲ因子は「乳幼児志向」であった。「育児肯定」下位尺度得点の平均値は4.00±0.80と高得点であるのに比べ、「育児行動不満」下位尺度得点の平均値は3.56±0.69、「乳幼児志向」下位尺度得点の平均値は3.29±0.84と中得点であった。育児は、自己の成長にとって大切であり、重要であると思っているものの、育児を遂行することは、煩わしさや自分の行動が束縛されるものでもあると捉えていることが推察された。

「乳幼児志向」の平均点がやや低いことについては、接触経験児との関係が影響していると考えられた。接触経験した児と学生の関係は、60%以上が甥・姪、または親戚の子どもであった。星野ら⁹⁾は、親戚のこどもとのかかわりにおける子ども観は、血のつながりのある存在ではあるが、頻繁には会わないという状況から、「扱いにくさ」「戸惑いイメージ」「理不尽イメージ」があることを明らかにしている。このことから、本研究の結果でも、「乳幼児志向」の得点が低かったことは、親戚のこどもとのかかわりが影響していると推察された。

以上のことから、本研究の対象者は、育児を自分自身の視点で捉えており、児側の視点からみた育児では捉えていないこと、児に対して戸惑いや扱いにくさを抱えていることが推察された。

下位尺度得点を看護学生と他学科学生で比較すると、看護学生が有意に「育児行動不満」と「乳幼児志向」が高かった。「育児行動不満」は逆転因子のため、得点が高いことは、育児行動に対する制限や煩わしさを受け止めていることが示される。また児に対する戸惑いや扱いにくさを抱くことは少なく、児側からの視点から育児を捉えようとしていることが推察された。

3. 思いやり得点の特徴

思いやりとは相手の感情状態を的確に判断し、相手と同じ感情を感じる「共感能力」である⁵⁾。「思いやり尺度」によって思いやり得点を算出したところ、本研究の対象者の平均点が75.90±10.31点であった。内田⁵⁾が1998年に調査した女子大学生の平均点78.8±9.2点とほぼ同じ結果が示された。しかし、看護学生と他学科学生別の平均点では、看護学生が81.34±9.85点と高得点で

あったのに対し、他学科学生は69.59±6.56点と低く、10年前の女子学生と比較して、思いやり、いわゆる共感能力は低下していることが明らかになった。

4. 属性、接触体験とイメージ因子、児に対する関わり意識、思いやりとの関係

それぞれの下位因子の相関係数から、「好感度」イメージは「情緒性」イメージと児に対する関わり意識の「育児肯定」「育児行動不満」「乳幼児志向」の3因子に関連性があり、「情緒性」イメージは「育児肯定」に、「育児行動不満」と「乳幼児志向」は「思いやり得点」と関連があることが示唆された。しかし「意思性」イメージは他の因子と関連性がみられず独立したイメージ因子であることがわかった。

属性との関係では、きょうだいの数や出生順位は、赤ちゃんイメージ因子と関係性を示さなかった。これは野村らの研究⁹⁾と同様な結果であり、出生順位やきょうだいの数は、イメージ因子に関連しないことを裏付けることとなった。しかし星野ら⁸⁾は、きょうだいとの直接体験における子どものイメージは、肯定的なイメージと否定的なイメージの混在する両面的イメージやきょうだい葛藤イメージが影響されることを明らかにしている。したがって今後も調査検証していく必要性が示唆された。

接触体験による違いでは、「抱っこ」「おむつ交換」と「泣いている児をあやす」の体験項目で、イメージ因子得点と児に対する関わり意識、思いやり得点は、経験なし群よりも、複数回以上経験した群が有意に高い得点であった。以上のことから、児との直接的な接触体験の重要性が示された。

看護学生と他学科学生別に比較すると、看護学生は、児との接触体験がない者に比べ複数回以上経験した者が有意に「好感度」イメージを高め、加えて「育児肯定」と「乳幼児志向」を有意に高めていた。看護学生の特徴として、他学科学生と比べ、「思いやり」が高く、母性に関連する幼いものや弱いものを大切にする土壌が備わっていると考えられる。したがって、そのような特質をもつ看護学生は、児との接触体験をより多く積むことで、児のイメージをより肯定的に変容させ、乳幼児を中心とした育児を肯定し、積極的な育児観を培っていると推察する。

一方他学科学生は、児との接触体験がない者に比べ複数回以上経験した者が有意に「育児行動不満」を高めていた。すなわち接触体験を積み重ねることによって、育

児行動の煩わしさや行動の制限といった不満感情を低下させることが明らかになった。

児と触れ合う直接体験は児を多面的に理解する上で重要であり、次世代育成事業として、乳幼児とのふれあい体験事業を積極的に取り入れることの必要性が示唆される。しかし「思いやり」の差によって、児との直接体験が及ぼす影響の方向性が違っていることが明らかになった。ふれあい体験をより効果的なものとする為には、児との接触体験をより頻回に持つことに加え、人格形成される思春期までに「思いやり」をいかに高めておくかが重要であると考えられる。ただし、いつごろまでに「思いやり」は発達するのか、「思いやり」を伸ばす教育とはどのような教育か、さらには、ふれあい体験の内容や頻度、体験の時期について、今後の縦断的調査研究が必要である。

5. 赤ちゃんの範囲とイメージ因子、児に対する関わり意識との関連

赤ちゃんの範囲とイメージ因子との関連について、「好感度」イメージと「育児肯定」は、「一人歩きまでの児（1歳すぎの児）」をイメージした群が「這い這いまでの児（8-9ヵ月児）」をイメージした群に比べ有意に高かった。これは、林田らの調査結果⁹⁾と類似した結果を示した。すなわち年齢の大きな児に対してより肯定的なイメージを持っていることが示された。

看護学生と他学科学生を比較すると、他学科学生が、有意に月齢の大きい児をイメージしており、大きい児をイメージしている者ほど「好感度」イメージと「育児肯定」が有意に高かった。これは、調査時期が夏休み中から夏休み明けであり、看護学生は、既に発達心理学や看護学概論を履修し、児の成長・発達についての基礎的知識を持っていることが影響していると考えられた。

中谷ら¹⁰⁾は子ども虐待の加害者における要因として、子どもの行動を悪意的に解釈したり、子どもが段階を追って成長することを理解しないといった誤った認知的要因をあげている。親役割準備教育の一環として、ふれあい体験事業と並行した、基礎的な児の発達過程の知識を与える事が、赤ちゃんイメージの歪みや偏りを矯正し、より現実的な児をイメージすることができるものと推察する。

結 論

思春期後期のこれから母親となる女子学生の赤ちゃんイメージは概ね肯定的で、外見的イメージが優先しているものの、否定的な面や児の内面的イメージの両面から赤ちゃんをイメージしていることが明らかになった。

看護学生と他学科学生の比較から、看護学生は「思いやり」得点が高く、児に対する関わり意識の「乳幼児志向」が高いことが明らかになった。加えて、「育児行動不満」の得点が高い、すなわち育児行動に対する不満は低いことが明らかになった。

「思いやり」得点の高い看護学生ほど、児の「好感度」と「情緒性」イメージが高く、さらに児との接触経験を多く持つ者ほど、「好感度」イメージや児に対する関わり意識の「育児肯定」「乳幼児志向」を高めていた。

一方「思いやり」得点が低い他学科学生では、児との接触経験が多い者ほど、児に対する関わり意識の「育児行動不満」得点が高く、育児行動に対する不満が低いことがわかった。さらに赤ちゃんの範囲を月齢の大きい児まで含めて赤ちゃんとイメージしており、月齢の大きい児をイメージしているものほど、「好感度」イメージや「育児肯定」が高かった。

次世代の親役割準備教育として、児との継続的なふれあい体験を企画することの重要性が示唆されると共に、基礎的な発達心理学の知識の教授や「思いやり」をほぐくむ教育の在り方の検討が示唆される。

(なお本研究の一部は、第35回日本看護研究学会学術集会にて発表したものである。)

文 献

- 1) 少子化社会白書—少子化対策の現状と課題—, 144-146, 内閣府, 2005.
- 2) K.E ボウルディング: ザ・イメージ生活の知恵・社会の知恵 (大川信明訳), 5-7, 誠信書房, 1984.
- 3) クラウス・ケネル: 親と子のきずな, 90, 医学書院, 1985.
- 4) 野村幸子, 河上智香, 長谷典子 他: 子どもとの接触体験からみた看護学生の子どものイメージ, 人間と科学, 県立広島大学保健福祉学部誌, 7(1), 169-180, 2007.
- 5) 内田由紀子, 北山 忍: 思いやり尺度の作成と妥当性の検討, 心理学研究, 72(4), 275-28, 2001.
- 6) 松村恵子: 母性意識を考える, 文芸社, 2005.
- 7) 細野恵子, 市川正人, 上野美代子: 看護系学生と非看護系学生および保育系学生の乳幼児に対するイメージの比較, 名寄市立大学紀要, 3, 79-86, 2009.
- 8) 星野修一, 日潟淳子, 吉田圭吾: 大学生における子ども観に関する一考察, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要, 2(1), 33-42, 2008.
- 9) 林田りか, 中 淑子, 草野美根子: 入学前の看護学学生の子どものための接触および行為体験の実態, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, 3, 85-91, 2002.
- 10) 中谷美奈子, 中谷素之: 母親の被害的認知が虐待行為に及ぼす影響, 発達心理学17, 148-158, 2006.

*The characteristics of female students' ideas regarding having a baby
: a comparison of nursing students to the general student population*

Rika Nakagoshi¹⁾, and Masako Yamaguchi²⁾

¹⁾Ehime Prefectural University of Health Sciences, Ehime, Japan

²⁾Sapporo Medical University of Health Sciences, Sapporo, Japan

Abstract The purpose of this study was to clarify the characteristics of the ideas that female students have concerning having a baby.

The subjects were female students under 20 years of age in A prefecture. Responses were obtained from 300 students and the valid response rate was 65.2%. The results showed that :

1. There are three factors concerning the idea of having a baby. The first was composed of eleven items indicating “emotions.” The second was composed of eight items indicating “good feelings.” The third was composed of three items indicating “intentions.”
2. There were three factors concerning awareness about having a baby. The first was composed of seven items indicating “child care affirmation.” The second factor was composed of 9 items indicating “child care complaints.” The third factor was composed of 4 items indicating “infant-orientation.”
3. The students who had had contact with a baby frequently showed significantly high scores of “good feelings,” “emotions,” “child care affirmation,” “child care complaints,” and infant-orientation” in comparison with students without child care experiences.
4. Comparisons between general university students and nursing students showed a significantly strong sense of compassion. The nursing students how showed a high sense of compassion had significantly high “emotions” and “good feelings” scores.

Having contact with babies had a strong impact on the development of positive feelings towards having a baby. We suggest that we need to educate students to have compassion and to set opportunities for young people to have frequent contact with babies.

Key words : idea, factor, baby, contact with baby, compassion